



中国で進む大学離れ

中国は九月が新学期。キャンパスでは、パンパンにふくらんだキャリーバッグを重たそうに引きずりながら宿舎を探す新入生の姿が微笑ましい。

中国の大学定員数は「科学技術と教育による国興し」が唱えられた一九九八年の一〇八万から、今年約七〇〇万へと急拡大した。日本の十二倍に相当する。

その広き門となった大学を目指して受験者数も年々増加していった。しかし二〇〇八年の一〇五〇万をピークに四年連続で減少し、今年約九〇〇万まで落ち込んだ。いったい何が起きているのだろうか。

受験者減最大の要因は少子化に違いない。一九九〇年代初頭には二〇〇〇万を超えていた出生数は、二〇〇〇年代に入り一六〇〇万人前後で推移しており、十八歳人口の減少傾向は今後も続く。

しかし、受験者減少は少子化だけが理由ではなさそうだ。一言でいえば、国民の間で大学離れが急速に進んでいるのである。

合格しても入学を辞退する学生は毎年四〇万人に上るといふ。

大学に進学しないかどうか。国内ではなく海外の大学へ留学が珍しくなくなつた。海外留学する学生は二〇〇八年

の十八万人から今年四〇万人とわずか四年で倍増した。大都市の高校では、留学に直結した「国際班」が次々と設立されている。過酷な受験競争で海外に逃避したい学生や保護者のニーズに「国際班」が応えているのである。

さらにこの十年ほど、中国の教育や学術界の腐敗が明らかになり、権威を失墜したこともある。こうした理由はあるものの、大学が敬遠されるようになった最大の要因は別にある。就職である。大学生の就職難、卒業後の待遇悪化によって大学進学が人生の成功を意味しない現実に向面することになった。

そもそも大学進学の経済的負担は大きい。一年間の学費は農民の純収入に匹敵する。その一方で以前のように高等教育の有無が賃金に直結する時代は終わり、いまや農民工が比較の対象となる時代である。

四割が専攻とは関係のない仕事に就き、就職後も早期の離職や理想の仕事とのギャップに悩むのは大学全入時代の日本の若者の姿と重なり合う。中国教育部は、二年連続で就職率が六〇％に達しない専攻に対し、募集定員削減あるいは募集停止という措置に乗り出したが、「就職力」の低い専攻は名前を変えながら延命を図る。

就職難の一部受け皿は大学院という先送りである。今年の大学院生の募集規模は五八万人（博士六・七万、修士五一・七万）と一〇年前の二倍以上に上っている。

大学に入れば幸福を手に入れられる時代はよかった。大卒インフレは中国社会の活力低下を引き起こす。中国においても大学の意義が問われている。

(アジア研究所教授 遊川和郎)

✳️ 研究所だより ✳️

記録的な猛暑が終わり、ようやく秋がやってきました。現在、研究成果の取りまとめに取組んでいます。アジア研究所では、現在、次の5研究プロジェクトを実施しています。また、八月には西澤正樹教授を中心とする調査団を派遣し新疆財經大学と新疆ウイグル地域で共同調査を実施しました。

- ① 東南アジアのグローバル化とリージョナル化とその影響(3)
- ② アジア諸国における環境型社会
- ③ 新段階を迎えた東アジアⅢ
- ④ 北東アジアの経済・社会変容と日本Ⅱ
- ⑤ 二〇二〇年気候変動対応次期国際協調枠組み再構築に向けたアジア地域環境ビジネス連携の可能性に関する研究

セミナー「アジア・ウオッチャー」

を開催します。

日時：12月8日(土) 13時半～15時
会場：234教室
講師：遊川和郎アジア研究所教授
テーマ：「党大会を終えた中国と日中関係の今後」

日中関係の今後